

志に載たる、聊城人傳光宅が普陀山大士塔下藏零牙志に、嘉靖初年、有南峯和尚、過山東之靈巖寺、遺一齒、請僧轉呪藏之塔下、作零牙記、詞意精妙、太啓後學、余茲來南海、留三日、去而爲風濤所阻、復返山中、是日大病、夜深方愈、次日、忽蟲食殘牙自落、余因法南峯和尚之旨、且答大士攝受之恩、亦請僧轉呪埋於塔下、略中此牙得藏寶地、依大士慈光、則我身心全體、在光中也云々、また小兒のぬけ齒、上齒は地上に捨下齒は屋根に上る、是もろこし人の説也、養生類纂に、小兒退齒、上齧者置床下、下齧者拋屋上、云使齒速生、注に瑣碎録とあり、按博聞類纂又齒の痛に呪して、紙一枚を疊みて柱にあて、釘にて打つくる事、事林廣記に出たり、

〔多聞院日記〕永祿九年三月十六日、今曉夢に思後英齒五落ッ、夢心ニ、小塔院へこむべし、勤行の聲も聞やうにと持行處坊主と思ふ人、故舞禪房法印にてありし、彼人云、此間色々道具共預て、御無心申、悦喜すとて、西向の部屋へ同道して、是は大師秘術を盡して置給ふ所也トありし、見レバ、中略清潔なる井水大なる壺をうづみてあり、則其内へ五のはを入て歸レバ、又日中ニ少キ齒一ッおちてありし、夢覺て日記を見れば、去月此比齒落と見し、可有愁憂前相歟と無心元ありし、胤繼律師御房御遠行、万事はてきり不及是非候處、又如此夢を見る間、彌佛事かと心細キ物也、妄想も常之事なれども、去月の事慥なれば、誰か又疑ハン、せめて露命消なん、來生の善惡はえらね共、今世の苦惱は止めべき者哉、

〔白石紳書〕人は齒を以て命とするが故に、はと云ふもじをばよはひとよむ也、齒固はよはひをかたむる心也、

〔禮記〕文王世子文王曰、略中古者謂年齡齒亦齡也、

〔塵塚談〕下予顯道小川が江戸自負あり、今こゝろみに左に記す、略中

齒磨賣、一袋六文八文なり、求める者は一袋を一ヶ月二ヶ月も用ゆる物なるに、賣店夥しく名産も